

日本語と中国語の in-situ wh 疑問詞に関する対照研究

淡江大学(非常勤) 徐佩伶

本研究は、言語学の観点から日本語と中国語の疑問詞の統語的特徴と意味を対照し、移動しない疑問詞(in-situ wh-word)の性質を探求する。このような対照研究を通じて、言語の個別性及び普遍性を明らかにすることが目的である。

wh 疑問文は wh 疑問詞がどこに現れるかによりいくつかのタイプに分かれる。もっとも注目されているのは、文中に wh 疑問詞が現れるタイプである。(1a)に示すように、英語の wh 疑問文では疑問詞が文頭に移動している。それに対して、(1b, c)に示すように、日本語と中国語の wh 疑問文は、wh 疑問詞が項の位置に留まっており、いずれも直接疑問文として解釈されうる¹。

- (1) a. **What** do you eat __?
b. あなたは**何を**食べるの?
c. 你 吃 什麼?
あなた 食べる 何
‘What do you eat?’

英語のように、wh 疑問詞が移動する言語においては、疑問詞のスコープ解釈は移動先でなされる²。

- (2) 疑問詞のスコープ位置への移動
a. **What** do you think [he ate __]?³
(直接疑問文: wh 疑問詞 *what* が主文の一番前に移動し、そのスコープは文全体に及ぶ)
b. You know [**what** he ate __].
(間接疑問文: wh 疑問詞 *what* が埋込み節の一番前に移動し、そのスコープは埋め込み節のみである)

¹ wh-in-situ 言語とは、日本語や中国語の wh 疑問文に見られるように、疑問文形成において疑問詞が移動せず、文中の項の位置に留まるタイプの言語である。

(i) 日本語
a. あなたは**りんごを**食べる。(平叙文)
b. あなたは**何を**食べるの?(疑問文)

² 「スコープ」は、ここではある要素(演算子)が影響を及ぼす領域という意味で用いている。

³ (2)-(4)の例文におけるブラケット[]は、埋込み節の部分を示している。

日本語では、Q particle の「か」「の」が in-situ の疑問詞のスコープを表すことができる(3)。

(3) 日本語の場合

- a. ジョンが [メアリが**何を**買ったと] 思っているの?
(直接疑問文: Q particle 「の」が主文にあり、埋込み節にある wh 疑問詞「何」のスコープは文全体に及ぶ)
- b. ジョンが [メアリが**何を**買った**か**] 知っている。
(間接疑問文: Q particle 「の」が埋込み節にあり、wh 疑問詞「何」のスコープは埋め込み節のみである)

一方、中国語にも「か」「の」のような顕在的な Q-particle *ne* があるが、これは必ずしも疑問詞のスコープを表さない。なぜなら、(4a)に示すように Q particle *ne* は文末に現れなくてもよく、また、(4b)に示すように Q particle *ne* は埋め込み節には決して現れないからである⁴。

(4) 中国語の場合

- a. 你 知道 [他 吃了 什麼] 才 離開 (呢)?
あなた 知る 彼 食べた 何 CAI 帰る Q
'あなたは[彼が何を食べた]と知った後に帰ったの.'
- b. cf. (3b)
你 知道 [他 吃了 什麼 (*呢)] 才 離開
あなた 知る 彼 食べた 何 Q CAI 帰る
'あなたは[彼が何を食べたか]知った後に帰った.'

ここで以下の問題を提起したい。

(5) 問題提起

- a. 中国語の wh 疑問詞のスコープはどのように決まるのか。

⁴ 顕在的 Q particle 「呢」は sentence-final particle (SF-P)であり、疑問詞のスコープマーカールではない。その証拠として、Q particle 「呢」は疑問詞と共起しなくよく、また埋め込み文に現れることができず、他の SF-P (たとえば、可能性を表すモーダルの SF-P 「吧」)と同じ分布をする点が挙げられる。

- (i) 鞋子 *(呢)? 'what about the shoes?/ where are the shoes?'

靴 Q

- (ii) 你 知道 [他 去過 台北 (*吧)] 卻 不 說.
あなた 知る 彼 行く-EXP 台北 BA にもかかわらず ない 言う

Intended reading: 'You know that he has gone to Taipei, hasn't he? but you're not saying.'

- (iii) 你 知道 [他 去過 台北] 卻 不 說 吧.
あなた 知る 彼 行く-EXP 台北 にもかかわらず ない 言う BA

'You know that he has gone to Taipei but you are not saying, are you?'

- b. 中国語と日本語は同じ *wh-in-situ* 言語であるが、両言語の *wh* 疑問詞が統語的に同じ振る舞いをするのであろうか。異なるのであれば、どのように異なるのか、同じであれば、その共通性を言語一般性としてどのように捉えるべきなのか。

本論は、日本語と中国語の *wh* 疑問詞の統語的特徴、主に島の効果と介在効果、フォーカス効果を考察し、両言語の個別性及び言語の普遍性を見る。

1. 日本語の疑問詞の統語的特徴

1.1 島の効果

まず、(6a)の英語の文と(6b)の日本語の文を比較してみる。(6a)では、英語の疑問詞 *who* は関係節から抜き出して文頭の位置に移動すると、非文になる。つまり、関係節の中に基底生成される疑問詞 *who* は主節のスコープを取ることができないということである。それに対し日本語の場合は、(6b)に示すように、関係節の中にある疑問詞「だれ」は主節にある *Q particle* の「か」と関連付けることができ、主節のスコープを取ることができる。つまり、日本語の疑問詞は関係節内にあっても文は直接疑問文として解釈することができる。

(6) DP 島の効果

- a. *Who did John read [_{DP} the book [_{CP} __ wrote]]? (島の効果あり)
(疑問詞 *who* が DP 島の外でスコープを取ることができない)
- b. 君は[_{DP} [_{CP} 誰が書いた]本]を読みましたか? (島の効果なし)
(疑問詞「誰」が DP 島の外でスコープを取ることができる)

(6a)のように関係節からの抜き出しなどの *wh* 疑問詞に対する統語操作が許されないような現象は「島の効果」と言われている。(6b)に示した日本語の文では、関係節の中にある疑問詞が関係節の「島」に制限されないため、「島の効果」がないと考えられている(Watanabe 2001, 2003, Nishigauchi 2003 等)。

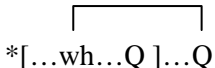
ところが、日本語には「島の効果」が観察されないわけでもない。「*wh* 島」が関与すると、島の効果が現れるという事実がある。「*wh* 島の効果」とは、ある要素が *wh* 要素を含む節にあると、その要素に何らかの統語操作を課することができないという現象である。日本語の場合は、埋込み節の「かどうか」は *wh* 島を形成していると考えられている(Watanabe 2003)。(7)に示す例では、英語でも日本語でも埋込み節の中にある疑問詞(*what*, 何)が主節で解釈されることができず、いずれも文の容認度が下がっている。このような現象は「*wh* 島の効果」とされている。

- (7) a. *[What did you ask [_{island} who bought __]]? (Watanabe (2003: 530))
b. ??ジョンは [メアリが 何を買った かどうか] トムに尋ねたの。

日本語には **wh** 島の効果があるという事実を次の例でも確認できる。(8a)は **wh** 疑問文として解釈され、(8b)は Yes/No 疑問文としか解釈されない。この事実は、(8a)では、埋込み節にある「だれ」は主節の「か」と結びつき、主節のスコープを取ることができる。一方、(8b)では、埋込み節にある「だれ」は主節の「か」とではなく、埋込み節内の「か」と結びつけなければならないと考えれば説明できる。

- (8) a. 鈴木さんは [田中さんが誰に会ったと] 言いましたか? (**wh** 疑問文)
 b. 鈴木さんは [田中さんが誰に会ったか] 言いましたか? (Yes/No 疑問文)
 (西垣内 (2003: 117))

この事実について、西垣内 (2003) は日本語の **wh** 疑問詞と Q particle 「か」との関連付けが「局所的」でなければならないと説明している。つまり、**wh** 疑問詞が一番近い「か」と結びつき、(9)のように埋込み節の「か」を超えて主節の「か」と関連付けることができないということである。

- (9) 
 *[…wh…Q]…Q

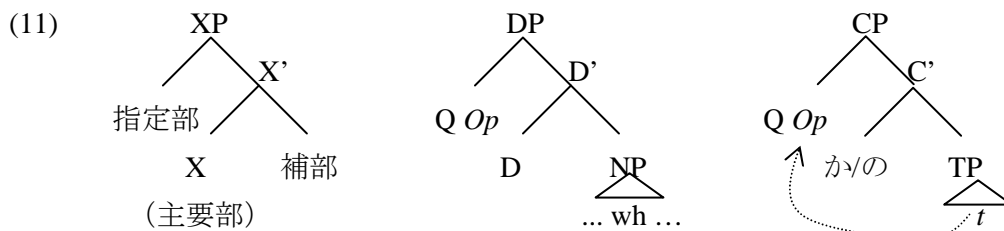
1.2 先行研究

英語では関係節の場合でも **wh** 島の場合でも「島の効果」が現れるのに対し、日本語では関係節による「島の効果」が観察されず、「**wh** 島の効果」が観察されている。この事実についていくつかの分析が行われている。Watanabe (1992, 2001, 2003)は、日本語の疑問詞に関して(10)のように仮定している。

- (10) 
 (Watanabe (2001 : 531))

Watanabe (1992, 2001, 2003) は、疑問を表す Q operator (ここでは音声を持たない operator を仮定している) が **wh** 疑問詞から分離することができると考えている⁵。(10)に示したように、Q operator が疑問詞 (**wh**) を含む DP (Determiner Phrase : 限定詞句) の指定部に基底生成しており、そこから Q particle の「か/の」が投射する CP (Complementizer Phrase: 補文標識句) の指定部に移動し、そこで **wh** 疑問詞のスコープが決まるという分析である。

⁵ 日本語の **wh** 疑問詞が英語と異なり、不定詞であり、quantificational particle (存在量可子「か」や全称量可子「も」) が **wh** 疑問詞と独立に存在している。



Watanabe (1992, 2001, 2003) の分析は日本語の「wh 島の効果」を説明することができる。つまり、日本語の wh 疑問詞は項の位置に留まっても、それに含まれている音声の持たない Q operator が統語部門で移動しているため、英語の wh 疑問詞の顕在的移動と同様に「wh 島の効果」を引き起こしたのである。それに対する関係節の場合は、日本語の Q operator が DP の指定部に基底生成しているので、関係節の島を越えることなく、島の効果が引き起こされず、(6b)の文が容認可能である。

Watanabe (1992, 2001, 2003) の仮定に対して、Hagstrom (1998) は Q particle の「かゝの」そのものが wh 疑問詞の一部であり、島がある場合、「かゝの」が島の外に基底生成すると仮定している。何が統語部門で移動するかは Watanabe と Hagstrom の仮定がやや異なるが、分析は同じである。つまり、いずれの分析も wh 疑問詞が移動するのではなく、顕在的な Q particle 「かゝの」、または音声の伴わない Q operator が wh 疑問詞の代わりにスコープ位置に繰り上げ、統語部門で移動するという分析である。

1.3 中国語における「島の効果」

同じ wh-in-situ 言語である中国語は、日本語と異なり、wh 疑問詞のスコープを決める「かゝの」のような顕在的な Q-particle がなく、wh 疑問詞が関係節、wh 島に現れても「島の効果」が観察されない。具体例を(12)、(13)に示す。

- (12) 張三 看了 [DP [CP 誰 買 的] 書]?
張さん 読んだ 誰 買う DE 本
‘どの人 x に対して、Zhangsan が[x が買った]本を読んだの。’
(cf. Zhangsan が[[誰が買った]本]を読んだの?)

- (13) 你 想知道 [誰 買了 什麼]? (Huang (1982:39))
あなた 知りたい 誰 買った 何
‘どの人 x に対して、あなたは [x が何を買ったかどうか]知りたいの。’
‘どのもの x に対して、あなたは [誰が x を買ったかどうか]知りたいの。’

この事実について、Tsai (1994) は中国語の疑問詞と別に存在している wh-operator があると仮定し、その wh-operator がすでにスコープ位置である CP の指定部に基底生成してい

るため、移動が関与せず、島の効果を引き起こすこともないと分析している。

以上、日本語と中国語の **wh** 疑問詞が「**wh** 島の効果」において異なった統語的振る舞いをするのを見た。その相違は両言語の **in-situ wh** 疑問詞とスコープを決める **operator** に対する語彙上の仮定と統語的操作の違いに帰結することができるようである。ところが、同じ **wh-in-situ** 言語である上、両言語の **wh** 疑問詞には共通性がないのかということを考えないといけない。以下、移動をめぐるもう一つの事実「介在効果」を見てみたい。

2. 移動と介在効果

「介在効果」とは、お互いに関連付けられる2つの要素の間に何らかの別の要素が入ると、文の容認度が下がるという現象である。(14)に示すように、「ジョンかビルが何を飲みましたか」という文は容認されにくいのに対し、「何」が「ジョンかビル」の前に移動すると、容認度が上がると言われている。

(14) 介在効果

- a. ?*[ジョンかビル]が **何を** 飲みましたか? (介在効果あり)
b. **何を**_i[ジョンかビル]が _{t_i} 飲みましたか? (介在効果なし)

(Hagstrom (1998:51))

(14)の事実について、Hagstrom (1998)によると、Q particle 「か」が **wh** 疑問詞の中からスコープ位置に移動し、その移動は「ジョンかビル」という介在要素を越えているため、「介在効果」が引き起こされ、文の容認度が下がるのだという⁶。(14)の構造を(15)のように示すことができる。

(15) a. (14a)の構造⁷

(Hagstrom (1998:53))

↓
か [ジョンかビル]が [何を _{t_か}] 飲みました

b. (14b)の構造

↓
か [何を _{t_か}]_i [ジョンかビル]が _{t_i} 飲みました

さらに、Yanagida (1996)の観察では、フォーカスを担う要素「さえ」「も」「しか」も介在要素として機能し、それらの要素が(16)に示すように、疑問詞「何」と主節の Q particle 「の」との関連付けを阻止しており、文の容認度が下がっている。一方、(17)に示すよう

⁶ Hagstrom (1998)では、島の無い場合、Q particle は構造上一番低い疑問詞 DP の中に基底生成すると仮定されている。

⁷ 日本語の Q particle が前置されるのは図式化のためであり、実際の linear order ではない。

に、「何」がフォーカスを担う要素の前に移動すると、文の容認度が上がる。

- (16) a. ?*ジョンは [メアリにさえ] **何を** 送ったの。 Yanagida (1996:30)
b. ?*ジョンは [メアリにも] **何を** 送ったの。
c. ?*ジョンは [メアリにしか] **何を** 送らなかったの。

- (17) a. ジョンは **何を** [メアリにさえ] 送ったの。 Yanagida (1996:30)
b. ジョンは **何を** [メアリにも] 送ったの。
c. ジョンは **何を** [メアリにしか] 送らなかったの。

興味深いことに、中国語の wh 疑問詞でも介在効果が生じる例がある。たとえば、「ジョンかビル」と同じようにスコープを持つ表現である数量詞「有三個人」‘ある三人の人’を wh 疑問詞と共起させると、(18a)に示すように、「有三個人」‘ある三人の人’が疑問詞「什麼」‘何’より前にある場合、文の容認度が低く、(18b)のように、「什麼」‘何’が前置されると、文の容認度が明らかに上がっている。

- (18) a. ??[有 三-個 人] 買 什麼 ?⁸
ある 三-CL 人 買う 何
‘三人の人が何を買ったの?’
b. 什麼 [有 三-個 人] 買 ?
何 ある 三-CL 人 買う
‘何を三人の人が買ったの?’

また、(19)に示すフォーカスを担う要素「是」の場合も同様に、wh 疑問詞「什麼」がフォーカス要素より左に前置されると容認度が上がる。

- (19) a. *[是 張三] 吃了 什麼?
SHI 張さん 食べた 何
(lit.) ‘張さんが何を食べたの。’
b. 什麼 [是 張三] 吃了 ?
何 SHI 張さん 食べた
‘何を張さんは食べたの?’

以上の観察から、もし「介在効果」が移動によって引き起こされるものであれば、日本

⁸ 疑問詞が項である場合(18a)は、付加詞の場合より悪くないことが数人のネイティブによって確認されている。(18a)がよくなる場合の解釈は文脈に依存しているものである。

語の wh 疑問詞は operator 移動に関与しているから問題にならない。しかし、中国語の wh 疑問詞の場合は、Tsai (1994) が主張しているように、wh-operator が主節の CP の指定部に基底生成し、移動に関与しないとすれば、中国語の「介在効果」をどのように分析すべきなのかが問題になる。

2.1 「介在効果」と移動の有無

(18)、(19)に示された中国語の例を「介在効果」が現れている事実として扱うのであれば、wh 疑問詞が移動に関与しないという Tsai (1994)の仮定にとって不都合となっている。しかしながら、「介在効果」という現象は果たして移動に関係しているのかをまず確認しなければならない。「島の効果」が移動に関与することは英語のような顕在的 wh 移動をする言語から明確にされているが、疑問詞が in-situ である日本語と中国語の場合は、移動があったとしても「潜在的に」移動を行なっているとしか言えない。事実として日本語は「wh 島の効果」を除き、中国語と同様に関係節、また副詞節の場合となると、「島の効果」が観察されない。副詞節 (=付加詞の島) を含む日本語と中国語の例を(20)に示す。wh 疑問詞が主節で解釈されることができ、いずれも容認可能な文である。

- (20) a. メアリは[Adjunct-island ジョンが何を買った後で]出かけたの'
b. 張三 [Adjunct-island 在 [DP-island [你 買 什麼] 的 時候]] 回家了?
張さん に あなた 買う 何 DE 時 帰った
'Zhangsan は[あなたが何を買っているときに]帰ったの。'

また、もし「介在効果」が移動に関係しているのであれば、次のような例が容認可能であるという事実が説明できない。疑問詞が移動していないことを意味することになる。

- (21) a. ジョンは [メアリにさえ] 一体何を 送ったの。
b. ジョンは [メアリにも] 一体何を 送ったの。
c. ジョンは [メアリにしか] 一体何を 送らなかったの。⁹

(21)の例を(16)の例(以下に再掲)に比べると、疑問詞「何」に「一体」がつくだけで、(21)の文は直接疑問文として解釈されやすくなり、容認度が上がる。

- (16) a. ?*ジョンは [メアリにさえ] 何を 送ったの。 Yanagida (1996:30)
b. ?*ジョンは [メアリにも] 何を 送ったの。
c. ?*ジョンは [メアリにしか] 何を 送らなかったの。

⁹ これらの例文を三人の日本人母語話者に確認したものであり、(16)に対して「??」や「?/*」、「ok」の判断を下しているにもかかわらず、(21)の例になると三人とも「ok」という判断をし、容認性が高いと見られる。

これらの事実から、「介在効果」が移動の有無にどのように関係しているのかが疑問になってくる。中国語では疑問詞が移動に関与しないが「介在効果」が現れるというような事実があり、日本語では疑問詞が移動に関与しているが、「介在効果」を見せない事実もある。このような「介在効果」をめぐる矛盾をどのように解決できるのかを次の節で議論する。

2.2 考察

この節では、「介在効果」に関する更なる考察を行う。結論からいうと、(18a)と(19a)に示された文が容認度が低いのは、一般に言われている「介在効果」で捉えることができない。なぜなら、このいわゆる「介在効果」が(22)に示す統語環境で消えてしまうからである。(23)に示すように、疑問詞 *shenme* が D-link されている場合(23a)、または介在要素との間に節境界がある場合(23b)、予測されている介在効果がなくなり、文の容認度が上がっている。

(22) 「介在効果」が消える統語環境

- a. wh 疑問詞「什麼」‘何’が介在要素が D-link されている場合¹⁰
- b. wh 疑問詞「什麼」‘何’と介在要素の間に節境界がある場合

(23) a. D-link が関わる場合

算命師 說 有 三個人 會 買 什麼?

占い師 言う ある 三-CL 人 だろう 買う 何

‘占い師が三人の人が何を言うと言っているの。’

→「有三個人」「三人の人」は占い師が想定している「三人の人」と D-link されている場合

b. 節境界がある場合

是 張三 說 [李四 喜歡 什麼]?

SHI 張さん 言う 李さん 好きだ 何

‘張さんが李さんが何が好きだと言ったの。’

「介在効果」がある特定の統語環境で消えるということをどのように説明できるのか。本論では、それは「焦点」が関わっていると考える。まず、疑問詞や、介在要素など、D-link される要素について、(24)のように仮定し、そして「焦点の制約」を(25)に仮定する。

¹⁰ D-link とは、Discourse-link (談話連結) のことであり、話し手と聞き手が談話の状況から判断して、すでにある集合のメンバーを前提とするものに限定されなければならない。(Pesetsky 1987)

(24) 仮定

- a. 疑問詞は、基本的に[+Foc]を担う。¹¹
- b. 焦点化されるものは[+Foc]を担う。
- c. D-link されているものは、すでにある集合のメンバーを前提とするので、[-Foc]を担う。

(25) 焦点の制約

焦点を担う要素は、同じ節内にある他の焦点を担う要素に C 統御されてはいけない¹²。

以下、(24)と(25)を仮定し、上に示した事実の容認性を説明できることを示す。

(26) a. *[…intervener [+Foc]…wh-word [+Foc]…]

→ [+Foc]を持つ要素が同じ節内にある[+Foc]の要素に C 統御される。(25)に反する。

b. 介在要素が[-Foc]の場合

^{ok}[…intervener [-Foc]…wh-word [+Foc]…]

→ [+Foc]を持つ要素を同じ節内に C 統御する[+Foc]の要素がない。(25)に反しない。

c. 節境界のある場合

^{ok}[…intervener [+Foc]…[_{CP} …wh-word [+/-Foc]…]]

→ ([+Foc]と[+/-Foc])は同じ節内にはない。(25)に反しない。

(26a)は(18a)と(19a)の構造である。wh 疑問詞が[+Foc]で、「有三個人」「ある三人の人」と「是張三」が[+Foc]であり、[+Foc]を持つ要素が同じ節内にある他の[+Foc]の要素に C 統御されるため、(25)に示した焦点の制約に反する。そのため、文が容認不可能となる。次に、(26b)に示しているのは介在要素が D-link される場合の(23a)の構造である。疑問詞は[+Foc]で、D-link される要素が[-Foc]であり、[+Foc]を持つ要素を同じ節内で C-統御する[+Foc]の要素が存在しないため、(25)の焦点の制約に反しない。最後に、(26c)に示しているのは節境界のある(23b)の構造であり、介在要素と疑問詞は同じ節にないため、(25)の制約に反せず、予測通り文が容認できる。

よって、このような現象を単に一般の「介在効果」で捉えることはできず、本論では、(26a)の現象を「介在効果」と区別すべきだと考え、「フォーカス効果」と呼ぶことにする。もし、それが正しければ、「フォーカス効果」という現象は、wh 疑問詞がフォーカス要

¹¹ [Foc]は[Focus]素性の略字である。

¹² C-統御：任意の二つの節点 α と β が、いずれも他方を支配せず、 α を支配する最初の枝分かれ節点 β を支配する場合、 α は β を C 統御する。(Reinhart (1976:32))

素にC統御されることによって生じたものであり、移動によって生じたものではないと言える。さらにいうと、wh疑問詞がフォーカス要素を超えて移動しないからこそ(25)の制約に違反するため、中国語のwh疑問詞は移動に関与しないと考えられる。図式にすると、(27)のように示すことができる。

(27)

$$*[\text{CP Q } [\text{TP } \dots \text{intervener}_{[+\text{FOC}]} \dots \text{wh}_{[+\text{FOC}]} \dots]]$$

節境界の場合では、介在要素が埋込み節内の疑問詞をC統御するよう見えるが、Chomsky (2008)のフェーズ理論を仮定すると、埋込み節内の疑問詞が主節の介在要素にC統御される前にspell-outされるため、C統御の関係が成り立たないということで問題なく説明できる。

(28)

$$[\text{CP Q } [\text{TP } \dots \text{intervener}_{[+\text{FOC}]} \dots \{\text{CP } \dots \text{wh}_{[+\text{FOC}]} \dots\}]]$$

以下、(25)に示した「焦点の制約」が日本語で見られる「介在効果」の現象を中国語と同様に捉えられるかどうかを検証する。

2.3 検証

日本語で見られる「介在効果」が「フォーカス効果」であるかどうかを(26)に示したスキーマで検証することができる。それぞれの例を(29)-(31)に示す。

(29) = (26a)の例 (介在要素もwh疑問詞も[+Foc]の場合)

- a. ?*ジョンは [メアリにさえ] **何を** 送ったの。 (Yanagida (1996:30))
- b. ?*[ジョンかビル]が**何を** 飲みましたか? (Hagstrom (1998:51))

(30) = (26b)の例 (介在要素が[-Foc]である場合)

- a. ジョンは メアリに **何を** 贈ったの。
- b. ジョンが **何を** 飲みましたか?

(31) = (26c)の例 (節境界のある場合)

- a. ?^{ok}メアリさえ [CP ジョンが**何を**送った] と言っているの?
- b. ?^{ok}メアリも [CP ジョンが**何を**送った] と言っているの?
- c. ?^{ok}メアリしか [CP ジョンが**何を**送った] と言わなかったの?

(29)-(31)に示した例は(26)で予測された通りである。(29)では、介在要素とwh疑問詞が[+Foc]である場合、文が容認されにくく、(30)と(31)では、介在要素が[-Foc]である場合、

または節境界がある場合、文の容認度が上がっている。よって、日本語の wh 疑問詞も「焦点の制約」に従っていると考えられる。また、wh 疑問詞が D-link される場合、(32)に示すように、介在要素が[+Foc]であるが、疑問詞が D-link されているので[-foc]となり、(25)の制約に反せず、文が容認可能になると予測できる。

(32) c. 疑問詞が[-Foc]に関わる場合

^{ok}[...intervener [+Foc]...wh-word [-Foc]...]

→[+Foc]の要素に C 統御されるのは、[+Foc]を持つ要素ではない。(25)に反しない。

(32)を検証するには、D-link される wh 疑問詞「どの N」を使って確認できる。「どの N」は答えとなる集合がすでに文脈にあった wh 疑問詞であり、(33)が示すように、いずれも予測通り文の容認度が高い。

(33) = (26c)の例 (wh 疑問詞が D-link される場合)

- a. ジョンは国を離れる前に皆に自分の集めた切手を贈ったんだってね。ジョンはメアリのことがあまり好きじゃないはずだけど、最後だからというこいでメアリにも贈ったと聞いたよ。**[メアりにさえ] どの切手を 贈ったの。**
- b. ジョンは夏目漱石のファンで、友達の誕生日の時にはいつも夏目漱石の本を贈るよね。先週は親友のメアリの誕生日だったから当然贈ったと思うんだけど、ジョンは **[メアリにも] 夏目漱石のどの本を贈ったの。**
- c. ジョンは小説家である。原稿を修正し上げるたびに、出版社の知り合いに送る。メアリは最近忙しいと聞いているので、今度の小説に関して、ジョンは **[メアリにしか] どのバージョンを 送らなかったの。**

次に、(21)に示した例 ((34)に再掲) は「焦点の制約」にとって反例のようになるが、その文の容認性をどのように説明できるのかを最後に以下で説明する。

(34) (21)を再掲

- a. ジョンは [メアりにさえ] **一体何を 送ったの。**
- b. ジョンは [メアリにも] **一体何を 送ったの。**
- c. ジョンは [メアリにしか] **一体何を 送らなかったの。**

まず、注目すべき事実として、「一体」の位置は介在要素より左に前置されても疑問詞の解釈が変わらない。¹³

¹³ Yanagida (1996)では、「一体」がフォーカスを担う operator であり、疑問詞を束縛しないとけない。

- (35) a. ジョンは 一体 [メアリにさえ] 何を 送ったの。
b. ジョンは 一体 [メアリにも] 何を 送ったの。
c. ジョンは 一体 [メアリにしか] 何を 送らなかったの。

Yanagida (1996)の主張を仮定し、「一体」は解釈上 VP より高い位置に移動し、VP に付加する「さえ」のような要素によって C 統御されない。そして「一体」に束縛される疑問詞が[-Foc]であると仮定すれば、もとの位置に残された疑問詞が「さえ」のようなフォーカス要素によって C 統御されても焦点の制約に反しない。そのため、(35)に示した文の容認性が自然に説明することができる。(34)(=21)では「一体」が[+Foc]を担う要素に C 統御される位置にあるが、それは PF (音声) の問題であり、解釈上の問題ではない。つまり、「一体」は「何」につく位置で発音されても実際の解釈は(35)と変わらないため、「メアリさえ」のような要素より高い位置にあると考えてもよいということである。

最後に、もし日本語の疑問詞が移動しなければ、日本語の「wh 島の効果」はもはや移動に関係ない何らかの現象となる。「wh 島の効果」の例を(36)に示す。これについて、西垣内(2003)に従い、wh 疑問詞と Q particle 「か」とを結びつけるプロセスにおいて「局所性」が働いていると考える。

- (36) ??ジョンは [メアリが 何を 買った かどうか] トムに尋ねたの。

(Watanabe (2003: 530))

文中に wh 疑問詞と関連付ける Q particle が複数であれば、wh 疑問詞が一番近い「か」と結びつけなければならないという制約が文法に存在している。この「局所性」は「介在効果」とは異なっている。なぜなら、介在効果を引き起こす介在要素は必ずしも wh 疑問詞と関連付けるものではないからである。よって、(36)の文の容認度が低いのは、wh 疑問詞の operator が「かどうか」を越えて移動したからではなく、一番近い「かどうか」と結びついたため、wh 疑問詞「何」が主節のスコープを取ることができず、直接疑問文として解釈できないのである。

3. まとめ

最後に疑問詞が項であるか付加詞であるかによって統語的振る舞いが異なることがある。wh 疑問詞が付加詞の「なぜ」となると、(37)、(38)が示すように、日本語も中国語も同様に文の容認が低い。それは、日中両言語の付加詞の wh 疑問詞が島の効果を引き起こしているからである。

-
- (i) a. ジョンは一体何を買ったの。
b. *ジョンは一体本を買った。

(Yanagida (1996:22))

- (37) a. *太郎は[三人の人が**なぜ**この本を買おうとしているときに]帰ったの?
b. *太郎は[**なぜ**三人の人がこの本を買おうとしているときに]帰ったの?
- (38) a. *張三 在 [DP-island [有 三-個人 為什麼 買 這-本 書] 的 時候]
張さん に ある 三-CL 人 **なぜ** 買う この-CL 本 DE 時
回家了?
帰った
‘張さんは[三人の人が**なぜ**本を買う時に]帰ったの。’
- b. *張三 在 [DP-island [為什麼 有 三-個人 買 這-本 書] 的 時候]
張さん に **なぜ** ある 三-CL 人 買う この-CL 本 DE 時
回家了?
帰った
‘張さんは[**なぜ**三人の人が本を買う時に]帰ったの。’
- (39) a. *メアリさえ[CP ジョンが**なぜ**本を送った]と言っているの?
b. *メアリも[CP ジョンが**なぜ**本を送った]と言っているの?
c. *メアリしか[CP ジョンが**なぜ**本を送った]と言わなかったの?

以上の考察から、日本語と中国語の疑問詞はまったく異質なものだとは言えない。つまり、日本語と中国語の疑問詞が項である場合、「焦点の制約」に従い、疑問詞が付加詞となると、島の効果において同じ振る舞いをするということである。よって、付加詞の疑問詞は両言語において、共通点があると考えられる。日本語と中国語を通じて、言語一般な特徴(普遍性)を研究することは自然言語のメカニズムを理解することに繋がることのできる。

参考文献

- Cheng, L.-S. Lisa (1991) *On the Typology of Wh-Questions*. Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures*, Volume 3, ed. by Adriana Belletti, 104-191, Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory*. ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria L. Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hagstrom, Paul (1998) *Decomposing Questions*, Doctoral dissertation, MIT.
- Huang, C.-T. James (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Doctoral dissertation, MIT.
- Nishigauchi, T. (1990) *Quantification in the Theory of Grammar*, Kluwer Academic Publisher, Dordrecht.
- Pesetsky, David (1987) "Wh-in-situ: Movement and Unselective Binding," *The Representation of (In)definiteness*, ed. by Eric J. Reuland and Alice G.B. ter Meulen, 98-129, MIT Press, Cambridge, MA.
- Reinhart, Tanya (1976) "The Syntactic Domain of Anaphora," Ph.D. Dissertation, MIT
- Tsai, W.-T. Dylan (1994) *On Economizing the Theory of A'-dependencies*, Doctoral dissertation, MIT.
- Watanabe, Akira (2001) "Wh-in-situ Languages," *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, ed. by Mark Baltin and Chris Collins, 203-225, Blackwell, Oxford.
- Watanabe, Akira (2003) "Wh and Operator Constructions in Japanese," *Lingua* 113, 519-558
- Yanadiga, Yuko (1996) "Syntactic QR in wh-in-situ languages," *Lingua* 99, 21-36
- Yang, C.-Y. Barry (2007) "Intervention Effect, Wh-movement, and Focus," *UST Working Paper in Linguistics* 3 (USTWPL 3), 95-108.
- 西垣内泰介, 石井康男 (2003) 「英語から日本語を見る」英語モノグラフシリーズ 13. 研究社
中村捷・金子義明・菊池朗 (2001) 『生成文法の新展開ーミニマリスト・プログラム』研究社